九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

今井源衛著「源氏物語の研究」

徳満，澄雄

https://doi.org/10.15017/12303

出版情報：語文研究. 15, pp.52-56, 1962-12-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

紹介

今井源衛著「源氏物語の研究」

徳満澄雄

今井源衛著「源氏物語の研究」が、この夏未来社より発行されたことは周知の事実であって、今更、私の如き浅学の輩が紹介の筆をとるなどとはかえって著者に対して非礼にあたることではあるが、著者に久しく私淑し、私個人にとって、この本ほど深い感動とよろこびをもって読んだ研究書は他にないので、この本の出版のよろこびを、できるだけ多くの知己と分ちあいたいと思って、敢えて紹介させていただくことにした。

本書の構成は、文芸論的な論考を集めた「研究」と、文献学的研究を収めた「資料」の二篇に区分され、「研究」篇においては、まず「源氏物語概説」の章において「従来の諸家の業績を謙虚すぎるほど謙虚に踏まえて、この物語の諸問題を多角的に追求し、随所に創見に満ちた問題提起を行い、初心者にとっても懇切に源語研究の最高水準まで導入する。次に「光源氏」「明石上について」「兵部卿宮のこと」「女三宮の降嫁」の各章において、登場人物論として、その人物の置かれた歴史的社会的背景と、作者紫式部の個性的創造力の二面から本文を分析し、著者のユニークな研究テーマである「歴史的諸条件に囲繞された作者紫式部の特異な創作主体とは何か」という問題を明快に追求してみせる。そして、「時代設定の方法」の章においては、登場人物論中、絶えず問題となる作者の時代意識の在り方を総括して解明し、さらに次章「源氏物語における漢詩文の位置」では、少し視点を変えて、平安朝の学問と教養の主流であった漢詩文を、作者がいかに主体的に消化して作品の中に生かしているかについて探究する。最後に、「戦後における源氏物語研究の動向」の章においては、再度念を押すかのように、戦後の研究成果を、著者自らの主体性によって、摂取、批判しているのである「研究」篇で著者が一貫して述べていることは、作者紫式部の主体性追求の必要、並びに研究者の主体性確立の問題なのだ。著者は繰り返して説得する。文芸作品が真に芸術の名に価するためには、その作品が歴史的社会的な下部構造に規定されながらも、その一般性に解消しきれない一回的な存在でなければならないから、その研究においては、研究者は作者の主体性を究明する独自の方法を確立しなければならないと。この信念が絶えず著者の配慮の中に生きている

からこそ、著者の論考を、所謂歴史社会学派の、文学の史料化の如きものとは根本的に異質的な、みずみずしい感覚にあふれたものとしているのである。さらに云えば、著者が絶えず研究者の主体性を確立するために厳しく自己を凝視しているが故にこそ、たといその研究動向が多分に放浪的であっても、かえって我々後進者にとっては魅力的なのである。本書の第二部「資料」篇は、一見著者の転向のような印象を与えるかも知れない。しかしこれは、著者自らが語るように「源氏物語の文献学的操作が自分にとってはたして何を意味するかを確かめてみようと思った結果の仕事」であって、著者の姿勢には初めから変りはないと思う。「源氏物語奥入の成立について」における池田亀鑑説に対する反論、「神宮文庫蔵『源語古抄』解題と翻刻」における、定家自筆本奥入との比較から始まる煩瑣な文献の校合、「了悟『光源氏物語本事』翻刻と解題」における、新資料の紹介と丹念な考証、といった労多き論考を根気よく読み進めながら、これらの論考がいずれも源氏物語成立事情の問題に密接につながるものだけに、私は著者が「文献学と文芸学との間の二者択一は必然ではない」と説く言葉を、今さらながら深く銘記したのであった。

以下、これらの各論考について、逐次章を追って要約しつゝ紹介していくべきかとも思うが、それもこの舌足らずの紹介文を続むほどの人にとっては無意味だと思うので、はなはだ礼を失することではあるが、著者と私との最初の出合であった昭和二十四年発表の「明石上について」の論考から、極めて恣意的な感想をのべさせていただく。昭和二十七年、私は九州の片隅で卒業論文のテーマを探すために、雑誌や単行本の源氏物語に関する論文を秩序もなく読んでいたのであるが、当時の紛糾する源語成立論争や、熾烈で明快すぎる左翼的な学派の主張の前に、全く混沌として為す術を知らなかった。このような時に偶然著者のこの論考に接し、突然目が覚めるばかりの強烈な印象を受けたのであった。それは下部構造論を直接文学の世界に持ちこんだような公式論に敢然と立ち向って、本文の克明な分析を通じ、物語の展開に添いながら、明石上の冷静で知的な自己抑制の性格美は、光源氏との階層的落差から必然的にもたらされたものであることを後づけ、同時に作者紫式部が、登場人物の造型に当って、人物の根源的な人間感情と、外的な社会機構との絡み方において人間を把えている事実を余す所なく闡明してみせていた。この論考に接し、源氏物語の古典的遺産をどのように継承するかといった姿勢でこの物語に入りながら、ただ情調的にこの物語の陰鬱な華麗さに耽溺しているばかりの私は、主体性をもった文学研究の高い可能性を啓示されたと云っても決して過言ではない。と同時に、当時の学生の常として左翼的でもあった私は、階級論的発想に基きながら、明石上の自己抑制の美を自己の生活信条とした作者に対して、一言の批判的言辞をも浴びせず本文解剖に徹し得た著者の冷静な態度に、ある種の不思議さを覚えたことも忘れない。著者はこの私の疑問に答えるかのように、本書の「戦後における研究の動向」の中で、当時の研究態度を自己批判して、「敗戦直後に生きる人間として、素朴にヒューメンであろうとすれば、自分がマルキシズムからは距離のある人間であることに充分気付きながら、しかも基本的には、やはり階級論的に問題を設定しないでは安んじられ

ないようなものが、筆者の心の中にはあった。だからそれは、本質的には、案外、理論よりも情感に近いものによって握えられ、それを方法の形に移したというのが、私にとっては実情であろう。」と述べているが、このあまりに正直すぎる告白を前にして、私は、文芸論における主体的方法確立の難しさをあらためて思い知らされるのである。著者は人物論の限界についても、同じ章で、「一人の人物に関する本文の叙述を丹念に洗い立てていき、広義においてその本文を解釈し、また時に作品全体の構想主題との関係を論じてみたところで、その間には、人物論としてはとうてい触れ得ないような複雑な問題が幾多介在することも確かである。（中略）主題自身も複雑な外来的要素によって二重四重にふくれ上っており、作者自身の、もしそういうものがあるとすれば固有の直接的な観念には、どこまで皮をむいていけば達せられるのか、というような疑問は数限りなく現れてくる。」と述べているが、著者の模倣をいちはやくして、二三の人物論をてがけてみた私は、あの時感じたえたいの知れないもどかしさはこういう所に由来するのかと、著者の誠実な述懐に触れ得る無上のよろこびを感謝しつつ、これも今にして思い知らされるのである。本書の「戦後の研究動向」の章はこういった意味で私には非常に有難かった。

しかし物事に限界のないものはない。著者が人物論として、「光源氏」の章において、若き光源氏の、好色と実直さとの相反する二重性格は、作者が、倫理の問題を意識しはじめることによって、もはや古代英雄譚の古型にのっとって主人公を設定するのに満足しきれず、延喜天暦前後の律令体制再興をめざす政教主義的風潮に乗って当時の文人貴族が理想とした才徳の士としての人格を、好色物語の主人公に付与して造型したものであると説き、その光源氏が六条院の世界では「心長き」パトロン的博愛精神の持ち主になり下り、第二部においては「すき」までもが悲劇の原因になっていく過程での、作者紫式部の主人公に対する理想の変化をあとづける時、今迄若き光源氏の性格の曖昧さを、古代物語における人間把握の甘さとか、技法の未熟さ、または並巻といった成立事情に由来するものと誤魔化して考えていた私にとって、作者が何故にこのような二重性格の不自然な人物を造型したのか、その歴史の必然がよく理解できて嬉しく、また同じく、「兵部卿宮のこと」の章において、紫の上の父である兵部卿宮を、作者が少々問抜けで、事大主義的性格を与えて損な役割に廻しているのは、最初は、ままこ物語の常套に従って書いていたものが、後に、摂関政治の勢力争いの場に実力もないのに顔を出した親王家を、時代遅れで滑稽なものとして感じた時代精神を反映して造型したのだと説き、さらにこの故宮（ふるみや）造型の材料として、村上天皇第四皇子為平親王をあげる時、私は、作者紫式部がこの端役的人物まで、如何に時代の心を反映させて造型したかが詳細に把握出来て、紫式部の偉大さに一層の驚きの念を禁じえないのである。次に「女三宮の降嫁」の論考であるが、これほど激しい論争をまき起こし、また将来も呼びおこすであろう論考は外に知らない。著者は、若葉巻冒頭の朱雀院婿選びの条を、院の婿がね品評の言や光源氏を婿に決定した経過を逐条的に分析し、朱雀院を錯誤の人であると結論するのであるが、その論旨を要約すると、まず桓武朝から花山朝までの間の皇女降嫁の実例を史実によって検証し、従

来厳格に守られて来た皇女独身主義が醍醐朝以来著しく崩壊して、多くの皇女が降嫁している事実をつきとめ、その上で朱雀院が女三宮降嫁を決断するのは時代通念に基くものであるが、光源氏の常識円満、将来安心、美男、皇族出身という条件を絶対視して女三宮の婿にしてしまうのは、光源氏の「古せぬあだけ心」と、また白痴的な女三宮と六条院の多くの妻妾達との間に当然予想出来る難しい人間関係を無視した楽観的観測であって、これは明らかに院の錯誤である。作者は、愛情こそ他の何ものよりも貴重であると、時代に一歩前進して考えていたのであるから、作者は院の錯誤に六条院の悲劇の originを切ったものとして暗に責任を負わせている、と説くのである。この論考は、検事の論告のように激しい調子のものであったことも手伝ってか、昭和三十年「文学」の六月号に発表されるや俄然反響をよんだ。当然、反対意見や修正意見の方が多かったわけで、今ここにそれらの意見を詳述すれば、逆に著者の論考の特異点が浮彫にされるとは思うが、その余裕もないので、著書の論考を読んだ当時から、また二三の反響の論文を読んで感じていることを述べると、一、特に若菜巻以後のように写実的色彩が濃厚な物語において、物語が準拠した時代の意識と、作者の生きた時代の意識・登場人物の意識・作者の造型意識の四者を、本文に即して厳密に腑分けすることは至難のわざではないか。時代意識の方はともかく史料に頼って客観的に論証できる余地が残されているにしても、作品の世界における登場人物の意識と、作者の造型意識とを厳密に区別して、作者の主体性を客観的に論証することはほとんど不可能ではないか。二、若菜巻執筆以前に作者は六条院の悲劇を新しく構想し、主題を定め、状況を設定して、事件の結末が必然的であるようにあらかじめ予定されたコースで事件は発展させられるのであるから、物語主題の把握に当っては著者が説くように各局面の微視的検討は不可欠ではあるが、その前に第二部の状況や大筋をどうとるかという点について、柏木密通事件だけではなく、他の一見夾雑的にみえる場面も含めて検討する必要はないか、ということである。別の表現をすると、著者のこの論考は、他に光源氏と紫上との愛情の危機、柏木の恋などといった局面について著者によってすべて論じつくされた時はじめて明確な意味を持つのではないかと思うのである。

以上、はなはだ勝手なことを書き流しているうちに、制限紙数の大半費したので、本書の約三分の一を占める「資料」篇の十分な紹介ができなくなってしまった。しかしもとより、著者の精力的な文献学的業績について、私の如き素人が一言でも言及するなどとは全くの分不相応というものであろう。従って、著者の結論の部分を抄出することによって、わずかに紹介の任を果させていただく。「源氏物語奥入の成立」という論考は、従来文献学の分野に絶対的な権威をもって君臨していた池田亀鑑博士の所説に対する果敢な反論である。即ち、池田博士が源氏物語の構想論成立論に関して、現存物語とはかなり相違した原作の存在を推定するに当り、一つの根拠としてあげた奥入の記述四点について、綿密な検討を加えた結果、それは池田博士が説くように必ずしも第一次奥入→第二次奥入の成立過程をとった証拠とは考えられず、逆に第二次→第一次と考えるのに都合が良いものが多く、従って第一次奥入の資料的価値に疑問を拘き、その点に関する限りでは、池田博士の源氏物語成立論は

動揺せざるを得ないと結論している。次の「神宮文庫蔵源語古抄の解題と翻刻」はこの奥入の研究に付随したものであろうが、ここで著者は、「源語古抄」と「自筆本奥入」との比較を軸に、伊行釈、第一次本といわれる明融本、大島本、それと別本、河海抄所引奥入とを丹念に校合して、「古抄」の性格を明らかにしている。その遂条的結論をここにまとめると、「源語古抄」は、定家没後あまり年を距てず、後人の手によって成立したもので、伊行釈の注を大量に加えたり、自筆本の定家説を取捨選択したり、または自ら注を加えることによって整理増補したものである。特にその際源氏物語難語注の域を脱して辞典的興味に奔った結果、三〇項目に及ぶ有職故実の注を加えていることは、この編者の一つの目的をうかがうことができる。本文系統としては、自筆本と第一次奥入とを包括するが如き形をとっており、別本とは縁が遠い。その他、問題点としては古年立の形成期を物語るものと注目すべき年立に関する事項を含むこと。自筆本では竹河巻末に在る「踏哥曲万春楽」の項が古抄では初音巻末と竹河巻に重出すること。（池田博士説の批判につながる）となる。次の「了悟『光源氏物語本事』翻刻と解題」の章は、最近発見された島原松平文庫蔵「歌書集」の風巻第二条の全文七丁の一文の資料紹介である。著者の解題によれば、紫明抄とほぼ同じ頃に双方共に没交渉で成立したこの片々たる小本は、源氏物語の成立事情論や文学評論史、書誌学等の基底に触れる事項を多く含み、非常に興味深い。特に九州の片田舎に、池田博士説の反論として好材料を含むこのような文献が眠っており、今回、著者の御尽力によって日のめをみた事は、私のような者にも文献学の怖しさが思い知らされるのであった。